

子ども学部心理カウンセリング学科の設置構想

I. 西九州大学の沿革

西九州大学は、昭和 43 年、「高度の知識を授け、人間性の高揚を図り、専門知識と応用技術をもって社会に貢献し、世界文化の向上と人類福祉に寄与する人材を養成する。」を建学の理念とし、佐賀家政大学家政学部家政学科の 1 学部 1 学科からなる単科大学としてスタートした。

西九州大学の教育方針は「あすなろう精神」という言葉に集約される。「あすなろ(翌檜)」とは檜科に属する常緑樹であるが、今はあすなろの幼木であっても、風雪に耐え、やがては檜の大木にも負けない力強い大樹になろうとする志を意味する。すなわち、今は荒削りで未完成の若者であっても

- ① 大地にしっかりと根を張り、少々の風では挫けないような信念と根性
- ② 未来という天空に向かって真っ直ぐに伸びていくような意欲と行動力
- ③ 周囲を見渡す大木のように高い志と広い視野

を持ち、進取の気質に富む人間性に裏打ちされた高度の専門的職業人の養成を人間教育の柱として取り組んできている。

西九州大学は、このような建学の精神を背景に、平成 11 年に大学院修士課程健康福祉学専攻を開設するとともに、翌平成 13 年にそれまでの家政学部を健康福祉学部に変更し、また社会福祉学科に学内コースとして臨床心理コースを開設した。さらに平成 14 年には、社会的なニーズに応じて大学院にも臨床心理コース（学内コース）を開設するに至った。

この健康福祉学専攻臨床心理コースは、平成 15 年 3 月(財)日本臨床心理士資格認定協会より臨床心理士受験資格(2種)の指定を受け、その後地道な臨床実践を積み重ねが認められ平成 20 年 4 月には、臨床心理士受験資格(1種)の指定を受けて現在に至っている。この間、臨床心理コースは佐賀県における唯一の臨床心理士養成指定大学院として臨床心理士のキャンディデイトを輩出し、そのなかから臨床心理士の資格取得後、佐賀県における心理臨床の実践を担う人材が育っている。

他方、本学は、平成 19 年には社会の高齢化その他の要因による社会変動にともなう社会的ニーズに応えるため、リハビリテーション学部リハビリテーション学科(理学療法学専攻、作業療法学専攻)を開設し、平成 21 年には育児・保育・幼児教育・児童教育などの分野で山積する課題に対応するため子ども学部子ども学科を開設するに至った。

此度の子ども学部心理カウンセリング学科の設置はこのような建学の精神と発展の

沿革を前提にするものであるが、設置の趣旨及び設置を必要とする理由は以下の通りである。

Ⅱ. 子ども学部心理カウンセリング学科の構想

これまでみてきたように、西九州大学は、創設以来人間の健康、福祉、教育・保育に寄与する専門職業人を養成する大学として徐々に体制を整え、今では3学部4学科、健康福祉学部（健康栄養学科、社会福祉学科）、リハビリテーション学部（リハビリテーション学科）、子ども学部（子ども学科）、ならびに大学院健康福祉学研究科（修士課程）からなる大学に発展してきた。

本学の卒業生はすでに7500人になるが、その中心は健康、福祉、教育・保育の分野における専門職業人として指導的役割を担っている。とりわけ社会福祉学科は、九州初の社会福祉専門の4年制大学として開設以来、一貫して地域住民を対象にした学生の実践教育を行ってきた。平成13年には、そのなかに臨床心理コースが設けられ、既存の社会福祉の実践教育に利用者の心を捉える視点が加わり、近年のますます複雑化する社会環境のなかで困難を抱える住民への支援力を有した学生を輩出することが可能となった。

臨床心理コースは、これまで社会福祉専門職としての人材育成教育の一端を担うと同時に、コース独自の実践教育も行ってきた。特に此度の新学科、心理カウンセリング学科設置の背景には、臨床心理コースとして取り組んできた実践活動を基盤とするものであるため、まずその概要を整理しておきたい。

1. 地域支援活動に立脚した臨床心理コースの実践教育

①チャレンジ幸齢セミナー

平成元年度に「高齢者の心とからだを活性化する教室（高齢者教室）」として開始し、年間5回～12回、大学周辺地域在住の高齢者を大学に招き、学生および教員が授業の一環として、プログラムを企画・運営してきた。平成5年度以降、毎年100名（延べ）を超す地域の高齢者が参加している。

②発達障害児とその家族への長期余暇支援グループ

平成17年の夏より、学齢期の発達障害児とその家族を対象とした、長期休暇支援グループを立ち上げ活動している。子どもグループに対してはi) 余暇に生かせる活動の体験、ii) 仲間作りの支援、iii) 子ども1人1人の個性を重視した自己評価の支援を、大人（親）グループに対しては、i) 会の安全性の保証、ii) 被受容体験の提供、iii) 子どもの捉え方の深化を、それぞれ目標として設定し、運営している。

③臨床動作法による在宅の障害のある人に対する支援活動

昭和63年、学生に対してより高度な専門知識・援助技術を学習できる場を提供することの重要性や必要性をふまえ、周辺地域に在住する障害者の保護者や親の会に臨床動

作法の訓練機会を提供するため、「土曜訓練会」活動を開始した。

④福祉施設利用者および福祉施設職員に対する支援活動

平成3年より平成12年まで10年間にわたり、重度知的障害者と施設職員が月1回来校する「障害者教室」を開設し、臨床動作法を中心とした、対人援助の技法を学ぶ体験教育を展開してきた。

⑤発達障害等支援・特別支援教育総合推進事業

文部科学省が推進した「発達障害等支援・特別支援教育総合推進事業」において、平成20～22年度の3年間、大学所在地の神崎市が「特別支援教育グラウンドモデル地域」に指定された。その事業活動の一環である「学生支援員の活用」において本学社会福祉学科で教職課程を履修している学生が、教員の指導の元、支援要員として神崎市内の小中学校に派遣された。学生にとって、教育現場での発達障害児の困り感や校内で行われる具体的対応方法について学ぶ場となった。

⑥ほっとひろば西九大

平成23年3月の東日本大震災の後、佐賀県に避難してきた家族を対象にした支援活動で、同年6月より週1回開催している。神園キャンパスにおいて、学部学生・大学院生・大学院修了生・教員がスタッフとなり、大人には情報交換や、悩みや葛藤を打ち明ける場、子どもたちには伸び伸びと遊び、心を癒せる場を提供している。平成24年12月末現在で、71回、延べ260世帯655名が参加している。学生にとっては、被災者の心のケアについて学ぶ貴重な場となっている。

このように、臨床心理コースは、これまでにも多彩な地域支援活動を通して学生への実践教育を行ってきた。しかし、以下述べるように、社会の変化にともない、国民のメンタルヘルスのあり方がこれまで以上に注目されるようになった今日、臨床心理学に対する期待や要請が高まっていると考えられる。そこで、臨床心理コースの特徴をより強力に前面に強力に打ち出すことで、地域や時代のニーズに応えることができるのではないかと考える。

2. 変貌する地域と心理カウンセリング学科新設のニーズ

近年のわが国の子どもを取り巻く地域社会の環境は、少子高齢化、家族機能の崩壊、長期にわたる経済不況、災害による危機の拡大、などの社会変動期にあるために、必ずしも子どもの心身の成長にとって望ましい環境とはいえ、早急な施策が求められている。平成20年に文部科学省より提出された「教育振興基本計画」においても、これらの点や課題が指摘され、それらをふまえた上での施策が提言されている。

子どもに関わる社会的事象をみると、例えば小学、中学、高校の不登校の数は、平成16年度以降16万人を超え続けている。また、全国の児童相談所に相談された児童虐待の数も、平成21年度には44,221件と増加の一途をたどっている。さらに、いじめの問題も深刻化・社会問題化し、教育現場での大きな問題となっており、あわせて発達障害

児への対応もさらに難しくなっている。

佐賀県においては、この10年間を通して、小・中学校合わせて毎年800人を超える不登校児童・生徒が発生している。平成14年度から平成23年度まで、小学校においては0.23%~0.31%（全国平均：0.32%~0.36%）、中学においては、2.41%~2.92%（全国平均：2.64%~2.91%）と、特に中学校においては全国平均を上回る高い割合で発生している年度も見られ、小・中学校ともに全国平均とほぼ同様の水準で推移していることが分かる。また佐賀県における児童虐待相談件数も、85件~140件と、この8年間、毎年100件を超える（平均115.9件/年）相談が寄せられている。

以上、佐賀県においても、子どもに健全な発達を保障することは喫緊の課題となっているが、今後益々心理的支援の必要性が高まって行くであろうことは想像に難くない。こういった子どもの抱える問題に対処していくためには、個々の子ども一人ひとりの内面を深く捉える視点と、子どもを支える保護者―教師―地域社会の関係性を適切に捉え、円滑な連携を構築する視点の両方を有することが必要と言える。

このように、子どもの豊かな心を理解し育む心理、障害児教育について実践的な学問研究への必要性が高まっていると同時に、心理専門職による地域社会支援への期待や必要性も強く求められている。とりわけ、子どもへの直接的な心理的支援と地域社会を通じた間接的な心理的支援についての学問的追究は、子ども支援に関わる専門的職業人の養成にとって不可欠の課題となっている。

こうした情勢に鑑み、本学科では、子どもの成長発達と地域社会への支援を心理学的な立場から理解し、支えることができる「地域社会に貢献する心理カウンセラーの資質を持った専門職者の養成」を目指して、「子ども学部『心理カウンセリング学科』」を設置することにした。

3. 子ども学部新学科（心理カウンセリング学科）を設置する意義

すでに明らかなように、新学科の設置は平成13年に健康福祉学部社会福祉学科に開設された学科内コースとして臨床心理コースであるが、開設以来臨床心理コースは臨床心理学の視点と専門性をも併せ持つ対人援助の専門家としての人材を養成してきた。コース開設以来の卒業生は平成23年度までの8年間で238名の卒業生になる。そのうち就職した189名、進学した26名、合わせて215名(90.3%)の卒業生が、地域の心理・福祉・医療分野で専門職として活躍している。そのほぼ1/4に当たる23.5%は高齢者関係に就職しており、障害児・者関係15.1%、病院関係12.2%、児童福祉関係5.9%と、福祉・医療関係が半数以上を占める。また、大学で学んだ臨床心理学的知見を、就職した一般企業の業務や人間関係に生かしている者も少なくない。

また、平成18年度から23年度の6年間で、卒業時に認定心理士資格の取得を申請したものは183名(90.5%)と、毎年高い割合で認定心理士を取得してきている。

今日、医療・福祉・教育などの多様な分野で臨床心理学の専門性にたいする期待が高

まっている。なかでも、毎年繰り返される児童虐待や育児放棄、学校現場における不登校やいじめ、自殺などといった子どもを取り巻く深刻な問題、また産業領域における長引く不況に起因する労働者の自殺や抑うつをはじめとするメンタルヘルスの問題は、喫緊の課題とも言える。従って、臨床心理学的専門性を身につけた専門職業人としての人材を養成することは、社会的な要請なのである。近隣の高校生に対する予備調査においても、大学の心理学科に対する高い興味関心のあることが示された。

今日のわが国の社会的状況においては、①子どもの「心を育てる」学校、②若者が「いきがい」を持って働ける社会、③高齢者が「安心して年齢を重ねる」ことができる社会、これらをスローガンとした、学校・家庭や会社・社会への臨床心理学的支援や、子ども・若者・保護者・高齢者へのカウンセリングなどが必要とされているのである。

このような現状を鑑みるに、今後国民生活におけるメンタルヘルスの維持・向上を図るためには、臨床心理学教育におけるより高度な専門性の習得と、対応の必要に迫られていると言える。このような臨床心理学に対する社会的な要請に応えることは、臨床心理学をカリキュラムの中心に据え、臨床心理学についてより深く、幅の広いカリキュラムを提供することが必要不可欠である。

端的に言えば、社会福祉士国家資格受験資格を取得することを主な目的として設けられたカリキュラムをもつ社会福祉学科において、これまで以上に臨床心理学に関する専門的なカリキュラムを提供することはもはや困難である。社会福祉学を柱とする社会福祉学科の中の1コースとして人材育成を担い続けることには限界がある。

この際、臨床心理学をカリキュラムの中心に据えた学科として独立することが、近年のこのころの問題にきちんと向き合い対処する人材(地域社会に貢献する心理カウンセラーの資質を持った専門職者)の養成を行うという目的に照らしてより適切であると考えられる。

4. 子ども学部における新学科のイメージ

社会福祉学科の1コースとしての存続を図るよりもむしろ平成21年に開設された「子どもの教育・保育」を教育の主眼とする子ども学部子ども学科と連携し協働することで、より質の高い、学校・家庭・地域社会に貢献する人材を養成することが可能になるのでないかと考えられる。

子ども学部子ども学科は開設以来、「人間の発達と教育のあり方を考究する教育学」と「幼児期の子どもの発達と支援のあり方を考究する保育学」を基盤に、子どもの心身の健やかな発達を支援する教育的視座に富んだ人材育成に取り組んできた。そこに心理カウンセリング学科を新たに設置することで、子ども学科もまた心身の健やかな発達に困難な状況を抱える子どもや彼らを取り巻く人々のところを理解し、ところを支える臨床心理的視座に富んだ人材を地域に輩出することが可能となると考える。

今日、学校現場での不登校やいじめ、発達障害や、人間関係を苦手とする子どもたちの急増など、少子高齢化時代における子どものこのころの問題に取り組む際に、スクール

カウンセラーなどによって、臨床心理学的知見やカウンセリングの技法が広く活用されている。

子ども学部心理カウンセリング学科を設置することによって、子ども学科との相互交流を深め、このような臨床心理学が蓄積してきた理論やノウハウを供給することが可能となる。ちなみに、ここでいう子どものこころを支える臨床心理的視座に富んだ人材とは、単に子どものこころを理解し、子どもを直接支援する人材の育成だけのことではない。子どもを取り巻く、家族・保育者・学校・教員・地域社会(コミュニティ)に対する深い理解に基づき、必要に応じて、子どもを取り巻く大人・環境に対する間接支援もできる人材である。

そのような人材を育成するためには、乳幼児期から高齢者までの生涯発達の見地からの人間理解が必要であり、その人間理解の中には、各種障害特性や精神病理などに対するより専門的で深い洞察も含まれる。従って、従来の子ども学科の理念と実績を相互に補完する意味においても、子どもを取り巻く様々な環境に対する理解と支援まで視野に入れた人材を育成しようとする心理カウンセリング学科を、子ども学部、子ども学科と並べて設置することは有意義であると考えられる。

Ⅲ 子ども学部心理カウンセリング学科における教育上の理念、目的

以上のような背景を前提に端的に言えば、設置を予定している子ども学部心理カウンセリング学科の教育理念は、**「人間への深い愛情と心の理解にもとづき、子どもと彼らを取り巻く人々への臨床心理学的支援が行える専門職業人及び地域社会に貢献できる人材の育成」**である。すなわち、子どもと彼らを取り巻く人々のこころと行動と発達に対する理解を深められる能力を学生に培い、豊かな人間性と確かなコミュニケーション能力を持った臨床心理の専門職業人、および専門知識と応用技術を持って社会に貢献できる社会人を育成することが、当学科の教育上の目的である。

1. 中心とする学問分野

心理カウンセリング学科が立脚する学問分野は、心理学の基礎理論に基づく「臨床心理学」である。臨床心理学を核としつつ、子ども学部を構成する教育学、特に障害のある子どもの発達支援にかかわる特別支援教育、医学、保育学および社会福祉学の近接諸科学の知見を応用する。

2. 教育研究上の到達目標

心理カウンセリング学科の教育理念である「人間への深い愛情と心の理解にもとづき、子どもと彼らを取り巻く人々への臨床心理学的支援が行える専門職業人、及び地域社会に貢献できる人材」を育成するために以下の到達目標を設ける。すなわち、①**共感的能力の育成**、②**臨床心理学的理解力の育成**、③**対人援助技法の習得**、④**心理的問題の創造的解決能力の育成**である。